

# 共生の実相

第2部 ①

「加害側」というレッテル

2016年7月26日の朝。埼玉県の自宅にいた宇田川健さん(46)はテレビの前から動けなくなっ

た。相模原市の障害者施設で入所者が殺傷された事件を伝えるニュース番組。「障害者は不幸をつくることしかできません」。逮捕された男の記した手紙が繰り返し紹介されていた。

「ここから出ていけ」という手紙が届くかもしれない恐怖にとらわれ、自宅がある団地の郵便受けの前を通る度に開閉を繰り返した。近所にある障害者施設の前を通るのも避けた。「その人たちが自分を見て、殺されるって思つかもしれないから」

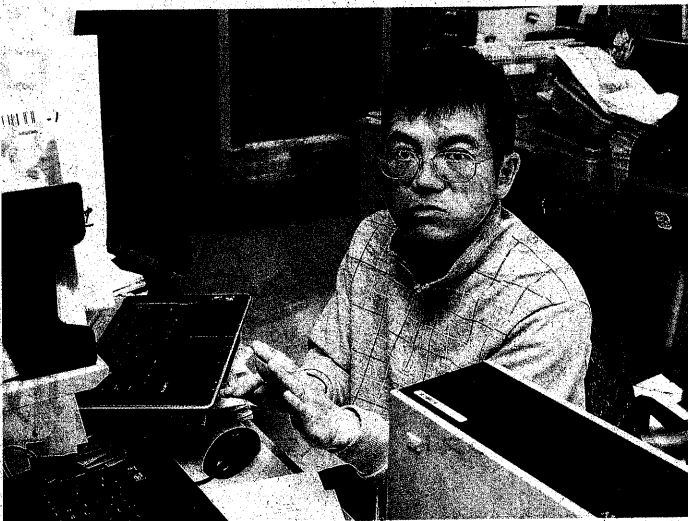
宇田川さんは統合失調感情障害という精神疾患があり、精神障害者手帳を交付されている。障害者の「抹殺」を唱える言葉。自分には生きる価値がないのか。「鋭い刃物が体に突き刺さるような衝撃でした」

やがて男には精神保健福祉法に基づく「措置入院」の経歴があったと報じられ始めた。嫌な予感が頭をよぎる。「精神障

害者が起こした事件」と世間が受け止めれば攻撃の矛先は自分たちに向かう。事件を起こした男に障害者として存在を否定される一方、社会の中ではこの男と同一視され「加害側」と扱われる。

## 障害者への偏見に恐怖

### 国の施策は「監視強化」



宇田川健さん=10月、千葉県市川市

見が広がっていた。

埼玉県で育ち、高校時代はバンド活動に熱中した宇田川さん。文化祭やライブハウスでベースを弾くなど活発だったが、筑波大に進学後、心のバランスを崩した。

疲労感に襲われる「うつ」と、気分が高まりと

NPO法人の共同代表となった今も、うつの波はやってくる。イベントや講演で疲労がたまると、体を起こすこともできない時期が数カ月続く。「自分たちは世間の人々にとって、できれば見たくない存在なのではないか」と感じることも多い。

相模原事件の被告が訴えていたとされるのは障害者を排除せよという「優生思想」だったが、国が打ち出したのは措置入院患者への対応を強化

する法改正だった。支援うにしか聞えない。社会を丸く治めるために精神障害者がいけにえにされている。そんな気がします」

19人が犠牲になった相模原の障害者施設殺傷事件。逮捕、起訴された男に措置入院の経歴があったことから、国は再発防止策を精神科医療の分野に求め、世間では精神疾患の当事者を「危険人物」と見なす風潮もみられた。事件を機に「共生」が叫ばれるようになった社会で、「加害側」との誤った印象による差別や偏見に苦しむ精神障害者の姿を追った。

事件から1年以上。問題の本質は置き去りにされ、多くの人の心に残ったのは「やっぱりおかしいな人がやった事件なんだ」という誤った印象だ。繰り返し耳にする共生という言葉への不信感。「僕にはお題目のよ

相模原殺傷事件 2016年7月26日、「津久井やまゆり園」で入所者が殺害されて死亡するなどした。植松聖被告(27)は事件前の16年2月、障害者殺害を示唆する言動を繰り返して措置入院となり翌3月に退院していた。国は「退院後支援(十分)」との有識者チームの指摘を受け、精神保健福祉法の改正案を国会に提出。①全措置入院患者について、都道府県などが地域協議会を設置し支援計画を作成②退院後は保健所設置自治体が相談指導③患者が転居すれば移転先自治体に計画を通知するとした。9月の衆院解散で廃案となったが再提出の可能性も。捜査段階の鑑定留置で被告は「自己愛性パーソナリティ障害」と診断され、検察側は完全責任能力が問えるかと判断した。

精神障害者らがつくる

# 共生の実相

第2部 ②

「加害側」というレッテル

「おまえらみたいなのがいるからこんな事件が起るんだ」。16年前、大阪精神医療人権センターの事務所で電話を取った山本深雪さん(64)は、受話器の向こうから聞こえてきた理不尽な言い加かりに言葉を失った。

2001年6月、大阪教育大付属池田小で、校舎に侵入した37歳の男が包丁で児童8人を殺害する惨劇が起きた。男には精神障害の診断歴があったことが判明。一方で、当初は理解困難な供述をし、その後「精神障害を装った」と語ったこと

も報じられた。その頃から山本さんらは不審な電話に悩まされ

た。受話器を上げて何もうた。無言のまま切れる。突然罵声が聞こえてくることもあった。精神疾患がある知人や、その家族からは「嫌がらせにあった」と相談も。自宅ドアの前に自転車を積み上げられ、通院できなくなった1人暮らしの男性。周囲に「外に出るな」と言われ、体調を崩した女性もいた。山本さん自身もうつ病を抱えている。「8人も

## 「惨事便乗」強まる監視



参院議員会館前で、精神保健福祉法改正への抗議集会に参加した山本深雪さん(奥) = 4月、東京・永田町

がショックだった。死刑を言い渡した03年の大阪地裁判決(確定)は「犯行に精神疾患の影響はなかった」と認定した。でも山本さんは社会のとらえ方は違うと感じた。「精神障害者という異なる世界の住人」が

「惨事便乗型精神保健」  
精神障害者の当事者はこんな言葉を口にしている。精神障害者の関与が疑われる重大事件が起るた

び、強制力を伴う対応が制度化されていく。そんな状況への抗議も込められている。

1964年に駐日大使が統合失調症とされる青年に刺されたライシヤワ―事件。新聞は「危険人物」と書き立て、翌年、医師1人の診断で強制力を伴う「緊急措置入院」を決められる仕組みが法制化された。

池田小での事件を受け、05年には心神喪失者医療観察法が施行。殺人など重大事件を起こした精神障害者の処遇を裁判官と医師が合議で決め、入院などを命令できる手続きが規定されている。

そして昨年7月に起きた相模原の障害者施設殺傷事件。全容の解明も進まない中、国は措置入院の在り方を問題視し「患者の支援強化」の名目で精神保健福祉法の改正を打ち出した。精神疾患のある患者は14年時点で約392万人。「危険な存在とみなし、新たな制度のもとに監視を強化する。背後にあるのは偏見であり、差別ですよね」山本さんがつぶやく。

## 線引きで安心する社会

今年4月、山本さんは参院議員会館前で開かれた法改正への抗議集会に参加した。仲間とともに掲げた横断幕。(これは精神障害がある人々への政府からのヘイトクライムです)。差別意識や憎悪を動機とする犯罪を指す言葉に込めた怒り。「政府が守るべきだと考える国民」に、私たちは含まれていないのじゃない

# 共生の実相

## 「加害側」というレッテル

第2部 ③

今年9月。複数の障  
害者が相模原の事件へ  
の思いをつづった本が  
出版された。「政府は、  
この事件を口実にして  
精神障害者を標的とし  
た監視強化に舵をきり  
出した」と記したのは、  
全国「精神病」者集団  
と名乗るグループのメ  
ンバー桐原尚之さん  
(32)。「私たちは、

桐原さんは昨秋、国  
の有識者検討会に出  
席。議論を急がないよ  
う求めたが、改正法案

## 「治安乱す存在」なのか

標的にされ命を奪われ  
た障害者のカテゴリに  
いながら(中略)加害  
側の立場に位置付けら  
れていたことを知り、  
とても苦しんだ」とも  
つづった。

2月に国会提出され  
た精神保健福祉法の改  
正案は、措置入院患者  
への対応見直しが柱。

自治体などによる支援  
計画は患者抜きでも策  
定可能で、その協議会

## 意思、自己決定 尊重して

「精神病」者集団。差  
別や排除に反対し、人  
権救済に向けて関連法  
の改廃要請などの活動  
を展開している。

「グループ名にカギ  
括弧が付いているのは、  
本人の意思に反して『  
病者』とされた仲間も  
いるという意味」と桐  
原さん。活動に参加し  
始めたのは19歳のこ  
ろだ。その数年前から  
幻聴や妄想に襲われ  
「統合失調症」と診断  
されていた。自ら頸動  
脈を絞め、意識を失う  
ことが癖になっていた。

特別支援学校への入  
学を余儀なくされ、高

等部では将来の希望を  
聞かれることもないま  
ま授産施設などに就職  
する課程に振り分けら  
れた。「研究者が法律  
家に」という夢に耳を  
傾けようとする人はい  
なかった。「今振り返  
れば進学が難しい病状  
だったのは分かる。で  
も世間が決めた『障害  
者』としての生き方を  
押しつけられている気  
がして悔しかった」。

だから本人の意思と自  
己決定が何より重要と  
考え、「私たちのこと  
を私たち抜きに決める  
な」と叫び続ける。



横断幕を持ってデモ行進する桐原尚之さん  
(左から2人目)＝2016年9月、東京都内

案の説明資料には当  
初、趣旨説明としてこ  
んな文言があった。

△二度と同様の事件が  
発生しないよう(中略)  
法整備を行う。桐原  
さんは大きな衝撃を受  
けた。「精神障害者が

「治安を乱す存在」と  
名指しされている。こ  
こまであからさまな決  
めつけは初めてです」

当事者らの抗議が相  
次ぎ、4月に文言は削  
除された。改正法案自  
体も9月の衆院解散に  
伴い廃案となったが、  
再提出の可能性は消え  
ていない。

桐原さんの携帯電話  
に保存された昨年9月  
の新聞記事。添えられ  
た写真には「共に生き  
るインクルーシブな社  
会を」と書かれた横断  
幕を持ってデモ行進す  
る姿が写っている。記  
事を目にした親戚はこ  
う言ったという。「よ  
く覚えていないけど障  
害者が障害者を殺した  
事件だっけ」。簡単に  
は埋められない距離を  
感じている。

(共同)村越西

紙面編集・吉川公弥

④

路面電車が行き交う世田谷の住宅街。障害者就労支援の事業所「ハーモニー」はビルの2階にある。ソファや厨房がある「くつろぎスペース」に、机と椅子の「作業スペース」。壁には「躁の良」ところ・困ったところ」の貼り紙も。メンバーと呼ばれる通所者約30人は統合失調症などと診断された30〜70代の男女。リサイクルショップの店番や公園清掃に、無理のない範囲で携わる。

(10月、東京都世田谷区)

車いすに嫌な顔を

△死ぬはずだった45歳の誕生日、先生手作りのアップルパイで診察室でパーティーやった。今も生きてるのが不思議。読み札の作者は諸星朝美さん(52)。感情の起伏が激しい境界型パーソナリティー障害で、身体障害もある。バスや電車に車いすで乗り込むと大抵嫌な顔をされるといふ。

「みんな『自分は、あっち側』の人間じゃない」と思っているんだろうな。私は摩擦を生む存在なんだ」。措置入院歴があつた相模原殺傷事件の被告も「あっち側」の人間じゃないと示したかつたのか。

10月下旬、諸星さんは都内でのかるた大会に参加した。終了後、一緒に机を囲んだ学生に「ハーモニーに遊びに来てね」と声を掛けると、笑顔で応じてくれた。「今日は少しだけ壁が低く感じられたかな」。表情が和らいだ。

（村越茜共同）

反響を呼び出版も

へうたがわれ続けて20年Vへい  
つの間にかご飯の食べ方が分から  
なくなつたVへおとうとを犬にし  
てしまつたV。すぐに理解するの  
は難しい文言が並ぶ読み札。新沢  
さんは「妄想や幻聴と付き合いな  
がら日々を暮らすために、私たち  
には想像もできない苦労を重ねて

読み札とするかるたを自主製作し、売り上げを工賃の支払いに充てることにした。

いる。そんな人たちが身近にいることを分かってほしかった。人間としてのすごさを感じます」。

かるたは反響を呼び、出版もされた。インターネットには「障害を食い物にしている」と批判の一方で、「こういう体験、俺にもある」といった書き込みも。読み札をまねて、自分の不思議な体験や失敗談を記した人もいた。

7年ほど前からは大学の授業にメンバーが参加する形で「かるた大会」を開催。学生に読み札をつ

# 共生の実相

相模原校舎

「加害側」というレッテル

⑤

「人は「受け皿がなく退院できない人はもつと多い」と指摘する。長く入院している人ほど地域で暮らすすべを失っていく。同じような体験を持つ仲間同士で支え合えないか。障害がありながら自立生活するメンバーと支援活動を続けている。

加藤さんは子どものころ引きこもり生活を5年ほど続けた。

中学校で外見をからかわれるなど、のいじめに遭った。それでも勉強が好きでなんとか通学を続けていた2年生の3月。励まし続けてくれた姉が突然病死し、学校に行けなくなった。

## 家族の存在支えに

入院治療を考えた。だが病棟で見たのは、仕切りもない畳の部屋に敷かれた布団に患者が横たわる光景だった。散乱した椅子や机、薬の影響でもうろうとした人、冷やかな態度の看護師。「逆におかしくなってしまう」と泣いて訴え、1日で退院した。

は体調管理をね」。接しているのは、生活の中で築かれる人間関係を長く持てなかった人たち。「必要なのは近所のおじさんや、パン屋のおばさんのような存在です」と加藤さんは話す。

## 「退院っていいな」

30年近い入院生活を経て病院を出た男性の言葉が忘れられない。「ご飯を作るのが大変で入院していた方が楽だと何度も思いました。でも夏に池袋でかき氷を食べた後、あまりのおいしさに退院してるといいなとつくづく思ったんです」。その時の生き生きとした笑顔が支えになっている。

## 人間関係の回復後押し

## 「社会から排除」と憤り

ソーシャルワーカーとして精神科病院で働き始めた36年前。長く入院させられている人たちに会った。家族への1度の暴力を機に統合失調症と診断され、入院から10年以上たつ男性。20年、30年を超える人もいた。「社会的入院」。医学的には必要がないのに、社会に受け入れ先がなく退院できないのだと知った。

「人生を奪っていますよ。この国では今なお病院中心の精神科医療がまかり通っている」。NPO法人「こらえるたいとう」(東京)で代表を務める加藤真規子さん(63)が憤る。

精神科病院の入院者数は2014年に約29万人。国が「受け入れ条件を整えば退院可能」とするのは約5万人だが、加藤さ



精神科病院を訪ね、入院者と話をするNPO法人「こらえるたいとう」代表の加藤さん

(東京都練馬区)

くれた。同級生が高校を卒業するころ、ようやく少しずつ外の世界に目を向けられるようになった。大学で社会福祉を学びソーシャルワーカーに。そして出会ったのが社会的入院者だった。「環境が違えば私もそうなっていた」。人ごととは思えなかった。

現在の活動の柱は、精神科病院への訪問と退院前後の支援だ。交わす会話は日常のことばかり。「秋にやってみたいことはある?」「季節の変わり目に

入院の必要がない人たちが病院に留め置かれるのは社会からの排除でしかない。「手のかかる人」かもしれない。周囲に迷惑を掛けることもあるだろう。「でもそれが人間同士の生活なのではないでしょうか。うまくいかないことがあれば一緒に考えればいいんです」と加藤さん。「共生」を掲げる社会の覚悟が問われている。(村越茜共同)

〓おわり